

学校適応感を高める授業の在り方

— 生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた中学校保健体育科の授業を通して —

三原市立第三中学校 山田 清志

研究の要約

本研究は、学校適応感を高める授業の在り方について考察したものである。所属校は、アセスの結果から、学校適応感に関連する因子の一つである学習的適応に課題があり、そのことが不登校にもつながっていることが分かった。文献研究から、学習的適応を促進させ、学校適応感を高めることが不登校の未然防止の取組として有効であることが分かった。

そこで、生徒の学習意欲を高め、「わかる・できる」授業を展開することが必要であると考え、生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた「授業作成シート」を開発し、このシートを活用して、中学校保健体育科の授業を実施した。その後、本シートを用い「授業づくりの徹底5項目」を確立し、学習的適応に課題のある第1学年で授業改善を図った。

授業後の分析により、保健体育科の授業を通して、学習的適応が促進されたことが分かった。第1学年については、要支援領域の生徒が増加し、学校適応感は高まらなかった。アセスの分析により、自尊感情やレジリエンスの育成が学習的適応に影響していることが分かり、今後は、集団づくりの視点も踏まえた学校適応感を高める取組について研究を進めていく。

I 主題設定の理由

文部科学省（令和元年）は「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」において、全国における小・中学校の不登校児童生徒数は164,528人（前年度144,031人）で、不登校児童生徒の割合は、1.7%（前年度1.5%）であると示している。

広島県教育委員会（令和元年）は、「平成30年度の広島県における生徒指導上の諸課題の現状について」において、広島県における不登校の現状として、国公私立小・中・高等学校（全日制・定時制）の合計は、4,711人で、前年度と比較すると、595人（14.5%）増加していると示している。不登校児童生徒の割合は小学校で0.7%，中学校では3.2%，高等学校で1.7%であると示しており、不登校児童生徒数は小学校では3年連続、中学校では5年連続増加しており、本県の深刻な課題となっている。

所属校の平成30年度不登校生徒数の割合は、5.1%であった。また、令和元年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙では、「学校に行くのは楽しいですか」の項目において、肯定的回答の割合が広島県を7.4ポイント下回っている。さらに、令和元年度基礎基本定着状況調査の生徒質問紙において

も、「学校に行くのは楽しいですか」の項目において、肯定的回答の割合が広島県を5.4ポイント下回っており、学校生活が充実していない生徒が広島県平均よりも多いことが分かった。

生徒の学校適応感を測定するために、所属校では、「学校環境適応感尺度（ASSESS）」（以下、アセスとする。）を使用している。この尺度は、大きく「生活満足感」「学習的適応」「対人的適応」の三つの適応領域とそれに含まれる6因子から構成されている。所属校の令和元年6月のアセスの結果を見ると、「要支援領域にいる生徒の割合」が、生活満足感8.5%，学習的適応22.7%，対人的適応2.8%であった。この結果から、所属校では、学習的適応に課題があることが分かった。

所属校では、これまでにピア・サポート活動を研究しており、ピア・サポートの取組が充実していることで、対人的適応の要支援領域にいる生徒の割合が2.8%であったと考える。しかし、学習的適応の課題は深刻で、学習的適応に関連するアセスの質問項目において、否定的な回答をしている生徒の割合を分析してみると、「勉強のやり方がよくわからない」34.7%，「勉強の問題が難しいとすぐにあきらめてしまう」35.4%，「授業がよくわからないこと

が多い」30.7%、「勉強について行けないのではないかと不安になる」39.8%という結果であった。

これらのことから、所属校は、学習的適応に関する質問項目で否定的な回答をする生徒の割合が3割以上であることが分かった。

そこで、本研究は、生徒の学習意欲を高め、学習的適応を促進する授業づくりについて取り組む。生徒の学習的適応が促進されることで、学校適応感が高まり、不登校の未然防止につながると考える。

II 研究の基本的な考え方

1 学校適応感とは

(1) 不登校との関連について

文部科学省（平成22年）は、「生徒指導提要」（以下「提要」とする。）において、学習上の不適応を起こす児童生徒は、「思うように学習の成果が得られないために周囲から求められる目標とのギャップから学習への自信や意欲を失い、不登校に陥るケースもあります。したがって、このような学習上の不適応から児童生徒を救うためには、『わかる授業』の推進や児童生徒の関心意欲を引き出し主体的に学べるよう指導上の工夫をするなど教育課程実施上の改善措置を図ることが不可欠です。」¹⁾と示している。

広島県教育委員会（平成31年）は、不登校を未然に防止するための対策として、「学校への適応を促進するためのガイダンス機能の充実」「児童生徒がわかる喜びを感じられるような学習の基礎・基本の徹底」などを挙げ、「教職員と児童生徒及び児童生徒同士が互いに信頼関係を深め、教育活動を充実させることが重要である。」²⁾と示している。

これらのことから、生徒が学習上の不適応を起こすことは不登校につながる要因となり、学校への適応を促進するための指導を工夫することは、不登校の未然防止の取組として必要であることが分かる。

(2) 学校適応感について

栗原慎二・井上弥（2010）は、適応感は個人と環境との主観的な関係とし、学校適応感とは、「『学校』にかかる『適応感』ですから、たとえば勉強とか、先生との関係とか、そういう学校に関するいろいろな場面での適応感を調べる必要があります。」³⁾と述べている。学校適応感を測定するアセスは、図1に示すような「生活満足感」「対人的適応」「学習的適応」の三つの適応領域とそれに含まれる表1のような6因子から構成されている。

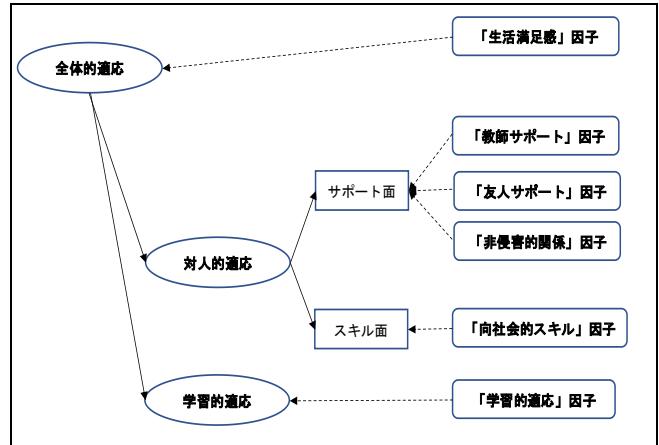


図1 アセスの構造①⁴⁾

表1 アセスの構造②

因子	内容
①生活満足感	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示す。
②教師サポート	担任（教師）の支援があるとか、認められているなど、担任（教師）との関係が良好であると感じている程度を示す。
③友人サポート	友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示す。
④非侵害的関係	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示す。
⑤向社会的スキル	友だちへの支援や友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示す。
⑥学習的適応	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示す。

栗原ら（2010）は、アセスの構造について、「全体的適応は、総合的な適応感である『生活満足感』因子によってとらえられると考えられます。また、『対人的適応』と『学習的適応』を総合したものとして位置付けられます。『生活満足感』因子以外は、ほとんど学校環境に限定されたものとみなすことができますが、『生活満足感』因子は全般的な適応感であるため、学校環境以外の要因も含まれていると考えられます。」⁵⁾と述べている。

これらのことから、アセスでは、学校での適応感と学校以外での適応感の両方を反映した全体的な適応感を「生活満足感」という因子で測定することができる。したがって、授業を通して「学校適応感」を高める場合は、生活満足感を除いた5因子と「対人的適応」「学習的適応」の2領域を「学校適応

感」としてとらえることができると言える。

(3) 学習的適応について

栗原ら（2010）は、学習的適応について、アセスでは、学習に関する適応を1因子でとらえています。ただし、この中身をもっと分析していくと、実はいくつかの因子がまとまっていると考えられます。たとえば、『学習効力感』（学習能力に対する自信）や『学習への動機づけ』といったものがあげられるでしょう。」⁶⁾と述べている。

また、因子間の相関関係については、図2に示す。「学習的適応」に強い相関をもっているのは「教師サポート」「非侵害的関係」「生活満足感」である。

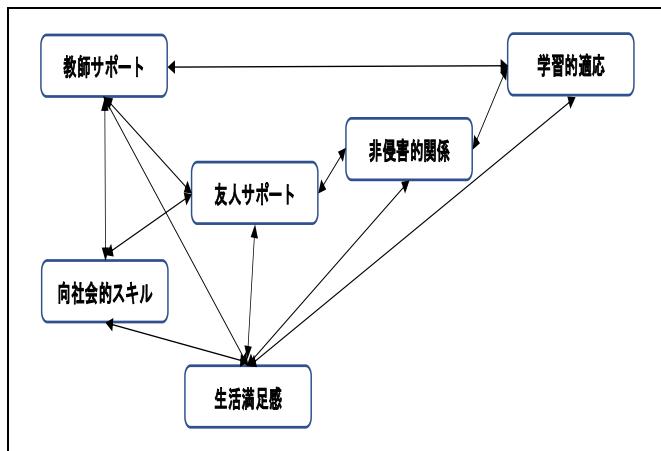


図2 相関関係から見たアセスの構造⁷⁾

表2 アセスの質問項目

因子	項目
教師サポート	担任の先生は困ったときに助けてくれる
	担任の先生は信頼できる
	担任の先生はわたしのことをわかってくれている
	担任の先生はわたしのいいところを認めてくれている
	担任の先生はわたしのことを気にしてくれている
非侵害的関係	友だちにいやなことをされることがある
	友だちから無視されることがある
	友だちにからかわれたりバカにされることがある
	仲間に入れてもらえないことがある
	陰口を言われているような気がする
学習的適応	勉強のやり方がよくわからない
	授業がよくわからないことが多い
	勉強の問題が難しいとすぐにあきらめてしまう
	勉強について行けないのでないかと不安になる
	自分は勉強はまあまあできると思う

表2に「教師サポート」「非侵害的関係」「学習的適応」に関するアセスの質問項目を示す。

生活満足感については、学校以外での適応感も含まれるため、表2からは外す。学習的適応を促進させるためには、表2に示す質問項目に生徒が、肯定的な回答をすることができるよう授業を展開していくことが必要であると考える。

2 ユニバーサルデザインの授業づくりと生徒指導の三機能とは

(1) ユニバーサルデザインの授業について

桂聖・川上康則・村田辰明（2014）は、「授業のユニバーサルデザインとは、気になる子に対する『指導の工夫』と『個別の配慮』によって、クラス全員の子どもが楽しく『わかる・できる』授業をつくることを目指すということ」⁸⁾と述べている。

小貫悟・桂聖（2014）は、学校教育の中のユニバーサルデザインは、「発達障害がある子だけでなく、すべての子にとって参加しやすい学校、わかりやすい授業であること」⁹⁾と述べており、授業をユニバーサルデザイン化する14の視点として、図3のモデル図を示している。この図は、授業をピラミッド型の階層で表している。それぞれの階層における児童生徒のつまずき（バリア）を生じさせる特徴がピラミッドの左側に示されており、ピラミッドの右側には、つまずき（バリア）を突破するための視点が14個挙げられている。

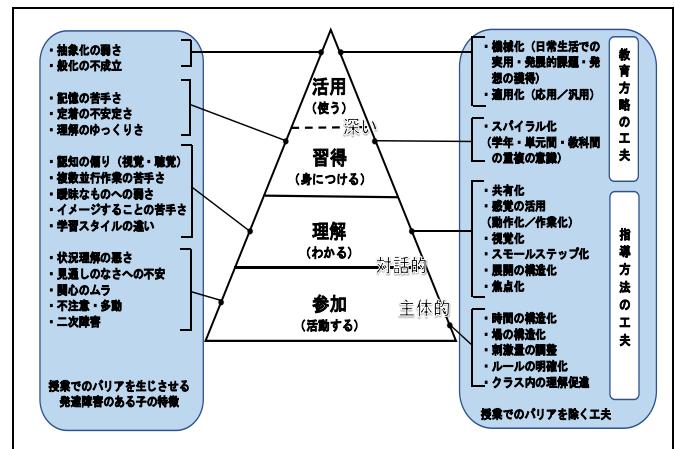


図3 授業のユニバーサルデザインのモデル

竹野政彦・林香（平成28年）は、「主体的な学び」を促すユニバーサルデザインの授業モデルを開発し、「授業をユニバーサルデザイン化することは、児童生徒にとって『主体的な学び』となり、学習意欲を高めること」¹⁰⁾を明らかにしている。

「中学校学習指導要領（平成29年告示）」では、指導計画の作成と内容の取り扱いにおいて、「障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。」¹¹⁾と示されている。

これらのことから、ユニバーサルデザインの授業は、学習指導要領で示されている「学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫」として、効果的であると考える。また、主体的な学びを促すことで学習意欲を向上させることは、所属校生徒の課題である学習的適応を促進させるために有効な手立てであると考える。

（2）生徒指導の三機能について

「摘要」において、「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すもの」¹²⁾と示されている。

広島県教育委員会（平成31年）は、「児童生徒が自ら判断し、行動し、その結果に責任をもつという自己指導能力を育成することが生徒指導の目標である。」¹³⁾と示しており、自己指導能力を育成するためには、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」三つの機能をあらゆる教育活動に生かすことが重要であるとも示している。

池田隆・北野和則（平成24年）は、生徒指導の三機能を生かした学習指導案を作成し、授業評価表を活用した授業実践の効果について、質問紙及び行動観察法による分析を行い、「生徒指導の三機能を生かした学習指導は、生徒の学習意欲を向上させる上で有効である」¹⁴⁾ことを示唆している。

これらのことから、生徒指導の目標である自己指導能力を育成することで、社会的資質や能力・態度を高めることができ、自己指導能力を育成するためには、生徒指導の三機能を、教育活動のあらゆる場面で生かすことが大切であることが分かる。

また、授業に生徒指導の三機能を生かすことは、生徒の学習意欲の向上につながり、指導者が、生徒指導の三機能を概念化して教育活動を展開していくことができれば、授業だけでなく、日々の生徒との接し方や、教育相談、キャリア教育など学校教育活動のあらゆる場面で、生徒への適切な指導・支援を行うことができると考える。

つまり、ユニバーサルデザインの授業に生徒指導の三機能を生かすことは、授業における学習意欲の向上を目指すとともに、学校生活全体における意欲の向上もを目指しており、自己指導能力が育成されることで、学習的適応もより促進されると考える。

3 生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた保健体育科の授業とは

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編」（平成30年、以下「保健体育編」とする。）において、体育の見方・考え方について、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」¹⁵⁾と示されている。

「保健体育編」の体育分野においては、学びに向かう力、人間性等の育成について、「運動における競争や協働の経験を通して、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たす、一人一人の違いを認めようとするなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う。」¹⁶⁾ことが示されている。例えば、授業の中で、自己決定の場を与えることは、「自己の役割を果たす態度」「自己の最善を尽くす態度」「公正に取り組む態度」につながり、自己存在感を与えることは、「一人一人の違いを認めようとする態度」につながる。さらに、共感的人間関係を育成することは、「互いに協力する態度」につながると考える。したがって、生徒指導の三機能を生かした授業は、学びに向かう力、人間性等の育成において、有効な手立てと考える。

「保健体育編」の指導計画作成に当たって、「日常生活とは異なる環境での活動が難しい場合には、不安を解消できるよう、学習の順序や具体的な内容を段階的に説明するなどの配慮をする。」¹⁷⁾ことが示されている。

これらのことから、生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた授業は、保健体育科の目標を達成するために有効な手立てであると考える。

Ⅲ 校内における取組

1 授業作成シートの開発

生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業

づくりを関連付けた「授業作成シート」（表3）を開発した。この「授業作成シート」は、保健体育科でユニバーサルデザイン化された指導・支援項目に、生徒指導の三機能を生かした具体的な手立てを加えて、導入、展開、終末でまとめている。研究授業では、この「授業作成シート」を活用して学習指導案を作成した。

図4には、学習指導案の例を示す。指導上の留意事項において、ユニバーサルデザイン化された学習活動と、生徒指導の三機能が生かされている場面について、その内容を明記している。

表3 生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた「授業作成シート」の例

過程	授業のユニバーサルデザイン化	生徒指導の三機能を生かした授業
	○指導上の留意事項 【ユニバーサルデザインの指導・支援項目】	●生徒指導の三機能 ・具体的な手立て
導入	○電子黒板等を活用して、学習内容の見せ方を工夫している。【学習内容の視覚提示】 ○単元全体の流れを掲示やワークシートで生徒に提示し、見通しをもたせている。【視覚化】 ○ゲーム・クイズ形式・間違い探し・教材を隠すなど、全員が参加できる活動を仕組んで、意欲を高めている。【視覚化・焦点化】 ○めあてを、常に見える位置に提示するなど工夫している。【めあての提示】 ○活動の流れを黒板やワークシートに示し、見通しをもたせるように工夫している。【本時の流れの確認】 ○活動内容や課題解決すべきことを身近な生活に結び付けて、イメージをもたせている。【焦点化】 ○既習事項を確認するなど、知識・技能のスパイラル化を図っている。【スパイラル化】 ○取り組もうとしていることを肯定的に評価し、意欲を高めている。【肯定的評価】	●自己決定の場を与える ・本時のめあてや活動内容をノートやワークシートに書かせたり、発表させたりしている。 ・導入の思考場面で、自分の考えをペアやグループ、全体で発表させている。 ●自己存在感を与える ・既習事項を確認する活動を仕組み、肯定的な評価をしている。 ・個人や学級の学習環境が整っている場合に、肯定的な評価をしている。 ●共感的人間関係を育成する ・導入の発問に対して、ペアやグループで思考させ、互いに意見交流をする場面を設定している。 ・活動に応じて意欲的ではない生徒に対して、共感しながら手立てを与えていく。

過程	活動内容 ●観点の評価	○指導上の留意事項	生徒指導の三機能
		【授業のユニバーサルデザイン化】 ※配慮を要する生徒への手立て	
導入	1 礼→体操→受身練習を行う。	○全員が参加できる活動にするために、毎時間の受身練習をグループでドリル化し、ルールを明確にして見通しもてる活動にする。【視覚化・焦点化】   	
	2 電子黒板の動画を見て本時で何を学ぶのか考える。	○電子黒板で「人が歩きながら石につまずいて転倒する動画」を見て、「人が転倒するときの条件」について考えさせる。生徒の身近な生活と結び付けることで、学習意欲を高める。 【学習内容の視覚掲示】 	
	3 人が転倒するときの条件について個人思考する。	○ワークシートに自分の考えを書かせる。  	
	4 全体で意見交流をする。	○「体重移動、片足体重、ひつかかる、油断する、見えない」などのキーワードがでている生徒を取り上げ、投げ技に入る前の崩しにつながるキーワードを全体で確認する。【ヒントの提示】  ※意見が出ない場合には、動画のひつかかる瞬間を静止画にして、見る視点を絞らせることで、片足体重などの意見を引き出すようにする。	

図4 学習指導案の例

このように、生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた手立てを明記することで、指導の視点が明確となり、どの生徒にとっても分かりやすい授業が展開され、学習意欲が向上し、学習的適応の促進につながると考える。

保健体育科は、「わかる・できる」がはっきりと表現されやすい教科である。したがって、運動の苦手な生徒にとっては、活動に消極的になることが多いと考える。所属校生徒の実態を見ても、保健体育科の授業に意欲的に取り組めない、または、取り組もうと努力したが、技能が身に付かなかったため、苦手意識をもち、保健体育科が嫌いと答える生徒は数名いる。

本研究授業では、保健体育科を苦手としている生徒が、生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた授業を通して、意欲的に学習に取り組み、「わかった」「できた」と実感することができる授業を展開していくことを目指す。

2 授業づくりの徹底5項目

生徒の学校適応感を高めるためには、保健体育科だけでなく、全ての教科で、学習的適応を促進させる授業づくりに取り組む必要がある。

そこで、保健体育科の研究授業後に職員研修を設定し、全職員が共通認識をもって取り組むことができる指導・支援項目について協議した。

所属校では、抽象的なめあてや振り返りにつながらないめあてが設定されているなど、めあてに関連する課題が多く挙がった。また、目的をもったペア学習などを仕組むことにも課題があった。

協議では、「授業作成シート」に示されている27の項目のうち、各教科等で共通してすぐに取り組めそうな項目から始めることにした。全職員でそろえることで効果を高めることを目指した。

協議の結果、「めあての提示」「めあての焦点化」「思考時間の確保」「ペア学習・グループ学習」「めあてに対する振り返り」の5項目を「授業づくりの徹底5項目」として確立した。

確立した「授業づくりの徹底5項目」を全職員に周知し、5項目を基本としながら、各教科の特性や学年の実態に応じて、「授業作成シート」をさらに活用して、授業改善を図るように促し、組織的な取組となるようにした。

検証については、学習的適応に課題のある第1学年で授業改善を図り、3週間の授業後に、学校適応感の高まりについて検証することにした。

IV 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた保健体育科の授業を行えば、生徒の学習的適応が促進され、学校適応感が高まるであろう。

2 検証の視点と方法

学習的適応については、指導者が所属する第2学年を対象に「保健体育科学習アンケート」で検証し、学習的適応の要支援領域にいる生徒については、数名を取り上げて分析する。

学校適応感については、第1学年を対象に、アセスで検証する。

検証の視点と方法について、表4に示す。

表4 検証の視点と方法

検証の視点	方法	対象
保健体育科における学習的適応が促進されたか。	事前・事後における「保健体育科学習アンケート」の実施	第2学年 男子 83名
学校適応感が高まったか。	「授業づくりの徹底5項目」の活用前と活用後におけるアセスの実施	第1学年 145名

V 研究授業の実施

1 研究授業の内容

- 期 間 令和元年11月19日～令和元年12月4日
- 対 象 所属校第2学年男子（4学級83人）
- 単元名 柔道
- 目 標

相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を用いて、投げたり押さえたりするなどの簡易な攻防ができる。

攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができる。

柔道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることなどや、禁

じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができる。

2 指導計画

本研究における指導計画を表5に示す。

表5 指導計画（全6時間）

時	評価規準
1	安全に気を配りながら、これまで学習した受身と固め技の復習をしている。
2	八方向の崩し方ができる。
3	崩しから投げ技につながる動きを工夫して練習している。
4	膝車のかけ方を理解している。
5	大外刈のかけ方を理解している。
6	学習した技を使って簡易試合ができる。

3 授業の実際と指導の工夫

生徒が「わかった・できた」と実感することができる保健体育科の授業を展開するために、視覚化・焦点化・共有化を工夫した。

視覚化については、単元を通して、格技場に大型テレビとタイマーを設置し、ワークシートやホワイトボードも活用して、めあての提示や活動の流れ、思考する時間などを視覚化することで、参加・理解を促進した。

焦点化については、視点を絞って思考させる場面を設定した。第2時では、「八方向の崩し」を学習する際に、人が歩きながらつまずいて転倒する様子を映像で流し、どのような条件で人が転倒するのか考えさせた。そこで、転倒するときの足の動きに視点を絞って考えさせることで、片足体重になると重心が不安定になることを学ばせた。このように「姿勢を崩すこと」が投げ技をかける際に有効であることを、視点を絞って提示したり、生徒の生活場面と結び付けたりして思考させることで、学習意欲を喚起させた。

共有化については、三人組の活動を工夫した。三人組の活動では、役割分担を明確にし、授業中に一緒に学んでいることを感じさせ、仲間から学びとることをねらいとした活動を仕組み、「わかった・できた」を実感できるように工夫した。

授業をユニバーサルデザイン化しながら、生徒指導の三機能である「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」ことも関連付けて指導することを意識した。これまで

の指導よりも改善した点は、生徒に自己存在感を与えることである。活動中に一人ひとりの生徒に声をかけることや、個別の評価を全体に還元するなど、生徒に自己存在感を与える場面をこれまで以上に意識的に増やして授業を展開した。

VI 研究授業の分析と考察

1 保健体育科における学習的適応は促進されたか

(1) 保健体育科学習アンケートで、学習的適応に関連する質問項目の肯定的回答回答は増えたか

対象となる第2学年の結果を図5に示す。

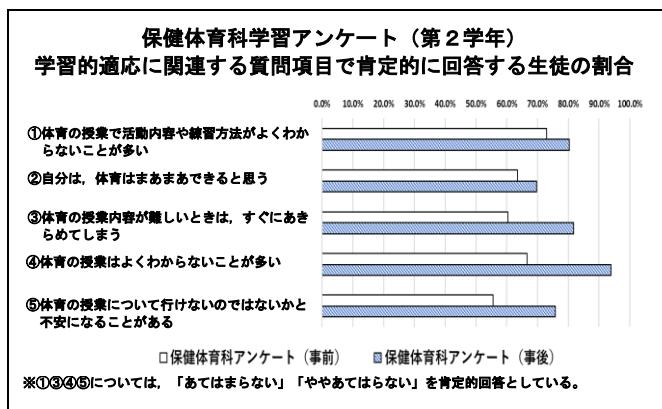


図5 事前・事後アンケートの結果

アンケートの結果から、すべての質問項目において、事前と事後では、肯定的回答回答割合が増加した。

また、生徒の振り返りを分析すると、これまでの授業よりも、「わかった・できた」と振り返りに書く生徒が増えたと実感している。生徒の振り返りの一部を、図6に示す。

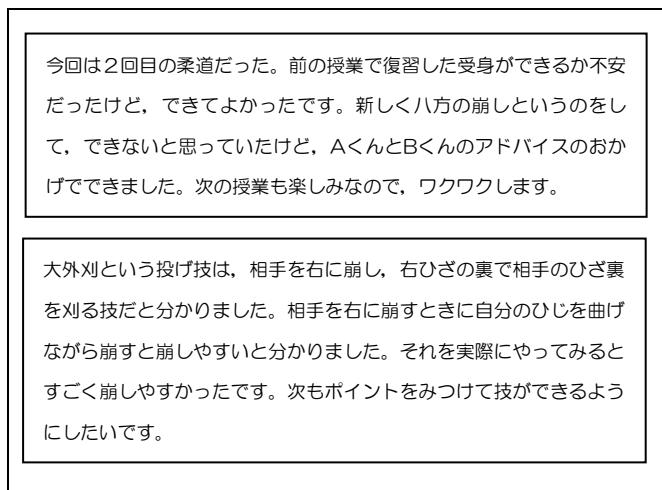


図6 生徒の振り返りの一部

これらのことから、研究授業を通して生徒の学習的適応は促進されたと考える。

(2) 要支援領域にいる生徒の変容

次に、アセスの学習的適応で要支援領域にいる生徒4名の回答状況を6月のアセスの結果と合わせて図7に示す。このグラフは、図5の保健体育科学習アンケートに示す5つの質問項目の平均得点を示しており、「自分は、勉強（体育）はまあまあできると思う」の質問項目以外は、得点を逆転して平均化している。5点満点の5に近いほど、肯定的な回答をしているグラフとした。

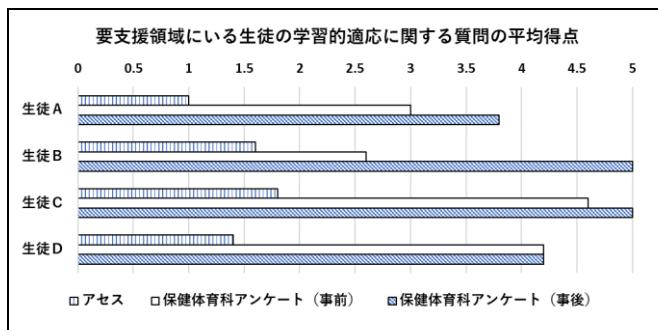


図7 事前・事後アンケートの結果

生徒Aと生徒Bについては、勉強も運動も苦手で、保健体育科の授業に意欲的に取り組むことができない生徒である。生徒Aと生徒Bが意欲的に学習に取り組めるように、人間関係を配慮した三人組のグループを編成したり、生徒の自己存在感が高まるような声かけを工夫したりした。

生徒Cと生徒Dは、勉強は苦手であるが、体を動かすことは好きという生徒であるため、事前アンケートの段階で肯定的な回答が多かった。生徒Cと生徒Dについては、思考場面でヒントカードを提示するなどの指導を工夫した。

このような指導の工夫から、要支援領域にいる生徒の肯定的回答回答が増えたと考える。

2 学校適応感は高まったか

学校適応感については、第1学年を対象にアセスで検証した。

事前・事後のアセスの結果を表6と表7のように、学習的適応と対人的適応の2領域で把握した。表6の事前の結果では、要支援領域を示す適応数値が40未満の生徒が対人的適応で1名、学習的適応で28名であった。表7の事後の結果では、対人的適応の人数は変わらなかつたが、学習的適応は32名であった。

表6 第1学年12月アセスの結果（事前）

12月		学習的適応					
		1~30	31~39	40~44	45~49	50~59	60~
対人的適応	1~30						
	31~39			1			
	40~44	3	2		3	4	
	45~49		4	7	4	10	1
	50~59	3	12	15	14	22	7
	60~	1	3	2	6	12	9

表7 第1学年1月アセスの結果（事後）

1月		学習的適応					
		1~30	31~39	40~44	45~49	50~59	60~
対人的適応	1~30						
	31~39			1			
	40~44	3	2	2	2	5	
	45~49	1	6	3	7	7	1
	50~59	3	7	10	12	24	6
	60~	4	6	3	4	12	14

事前と事後を比べると、対人的適応に変化はなく、学習的適応の要支援領域にいる生徒が4名増えている。このことから、第1学年の学校適応感は高まらなかつたといえる。

授業改善を図った期間が3週間という短い期間であったことが、一つの要因と考えられる。

また、アセスを学級集団で分析したところ、学習的適応については、学級集団によって偏りが見られた。特に「まあまあ、自分に満足している」「気持ちがすっきりとしている」などの自尊感情に関連した質問項目で否定的な意見が多い学級は、学習的適応の数値が低くなっていた。

自尊感情を育むことやレジリエンスを高めることが、学習的適応を促進させることにつながると考える。

なお、所属校職員の「授業づくりの徹底5項目」の感想として、「5項目の内容はわかりやすく、取り組みやすい内容であった。」「授業改善に役立った。」など、肯定的な意見が多かった。組織的な取組ができたことは、今後の研究を進めていく上で効果的であったと考える。

VII 研究のまとめ

1 研究の成果

生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業

づくりを関連付けた保健体育科の授業は、学習的適応を促進させることが分かった。

学校適応感を高めるためには、集団づくりも含めて、長期的な取組が必要であることが分かった。

2 研究の課題

今後は、継続して「授業づくりの徹底5項目」に取り組み、生徒の変容を分析していく必要がある。

また、自尊感情やレジリエンスの育成が、学習的適応に影響すると考え、集団づくりの視点も関連付けながら、研究を進めていく。

生徒指導の三機能とユニバーサルデザインの授業づくりを関連付けた「教科指導と集団づくり」の研究を進めていくことで、教師の指導力の向上を図り、学校適応感を高めていきたいと考える。

【引用文献】

- 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』p. 7
- 広島県教育委員会（平成31年）：『広島県教育資料』p. 177
- 栗原慎二・井上弥（2010）：『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版p. 9
- 栗原慎二・井上弥（2010）：前掲書p. 11
- 栗原慎二・井上弥（2010）：前掲書p. 11
- 栗原慎二・井上弥（2010）：前掲書p. 34
- 栗原慎二・井上弥（2010）：前掲書p. 33
- 桂聖・川上康則・村田辰明（2014）：『授業のユニバーサルデザインを目指す「安心」「刺激」でつくる学級経営マニュアル』東洋館出版社p. 6
- 小貫悟・桂聖（2014）：『授業のユニバーサルデザイン入門 どの子も楽しく「わかる・できる」授業の作り方』東洋館出版社p. 14
- 竹野政彦・林香（平成28年）：「通常の学級における特別支援教育の考え方に基づいた授業づくりの研究－『主体的な学び』を促すユニバーサルデザインの授業モデルの開発を通して－」『広島県立教育センター研究紀要－第43号－』p. 77
- 文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領』（平成29年告示）p. 130
- 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』p. 5
- 広島県教育委員会（平成31年）：前掲書p. 162
- 池田隆・北野和則（平成24年）：「自ら学ぶ意欲を育む生徒指導の在り方に関する研究－生徒指導の三機能を生かした学習指導法の開発と評価を通して－」『広島県立教育センター研究紀要 第39号』p. 25
- 文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編』東山書房 p. 25
- 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 30
- 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 234

【参考文献】

- 文部科学省(令和元年)：『平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』広島県教育委員会(令和元年)：『平成30年度の広島県における生徒指導上の諸課題の現状について』
- 広島県教育委員会(平成31年)：『広島県教育資料』
- 桂聖・石塚謙二・廣瀬由美子・小貫悟（2018）：『授業のユニバーサルデザインVol. 11』東洋館出版社